

母と子でつくる民芸品

大梶 優子

身のまわりにある素材を生かして作る楽しさ、伝統行事に欠かせない小物を準備する楽しさは、そのままくらしの楽しさでもある。

観光客が旅先で買い求めるように、私もチェコの民芸品といわれるものを身近に集めて、その素朴な美しさを味わう時期があった。その後、子ども達との生活が始まると、次第に作ることに関心が向かうようになった。みやげ物として商店に並ぶほどに吟味された素材を用いるわけでもなく、精巧な技術

を使いこなすというわけでもないのだが、休日のひとときをすごしながら、一緒に作ってきた民芸品がいくつもある。

絵付けたまご

絵付けたまごは、春を待つ心、春を祝う心のあらわれである。

一面に垂れ込めた雲が切れて、青空をかいま見る時、太陽の光の強さにびっくりする。朝晩は寒くて

も、コートの重さが気になるようになる。芽を出し始めた草木をいつくしんで、ふと歩みを止める。春一番のれんぎょう（チェコ語では、「金の雨」と呼ばれている）が、枝一杯に花をつける。こうしてゆっくりと春分の日が近づいて来る。

このカレンダーの上での春の始まりは、必ずしも暮らしの上での春の始まりとは言えないことが多いのだが、それでも自然も人々も、春の生活を準備していく。

この春の訪れを象徴するのは、復活祭（イースター）である。宗教上の復活祭は、十字架にかけられたキリストの復活を記念する行事で、春分の後の満月直後の日曜日に行われるので、毎年、日にはちかわることになる。

復活祭は、自然の復活、冬の間眠ったり、休んだりしていた動物や植物、生きるもの全てが甦って活動を開始する、その喜びを祝う季節の行事でもある。村々には、復活祭の二週間前の「死の日曜日」

の行事も残っていて、死や病気を象徴する人形を川に流し、冬に別れを告げる。復活祭の月曜日には、男性が柳の枝で編んだむちで、女性のおしりをたたき、女性は男性に絵模様を付けたたまごをプレゼントする習慣がある。また、スロヴァキアには、むちでたたくと同時に、水をかけるというやり方も残っている。どちらも、本来は、キリストの死を悼んで集まって来た人々を、時の権力者が追い散らすのに用いた方法ということだ。また、復活祭の象徴になっている卵、ひよこ、あひるは、多産を表すともいわれ、多くの伝統行事に見られるように、宗教上の儀式と土俗的な習慣が結びついて、人々の間に生き続けているのだろう。また、たまごの殻に絵模様を付ける習慣は、キリスト教が伝わる以前に既にスラブ民族の間にあったことが、モラヴィア地方の発掘で確認されている。

さて、たまごの絵付けだが、単純な方法から複雑な方法まで、その手法は多彩である。

まず、たまごの上と下に小さな穴をあけ、口で吹き出すようにして、中味を出す。絵付けを終えた後に、細いリボンを通すこともあるから、穴を小さくすることに気を使う必要はない。殻の中に水を通して洗い、水を切るようにして保管する。もうたまごが安く出回っている頃だから、一度に用意して、中味をカステラ風のお菓子やオムレツに利用することもできる。

最も簡単なのは、油性サインペンで絵を描くことである。絵筆を使って、花やあひるを描き、ラッカーをかける手法を伝統とする村々もある。独特な手法は、いわゆる「ろう染め」である。ろうそくに火をつけ、溶けたろうを針金の先に付けながら模様を描く。小さなことをする時には、割りばしの先をとがらせて、先を少しつぶしてやわらかくしたのを用いると扱い易いし、たまごの殻に溶けたろうがのり易い。線描きでなくとも、ろうをつけたはしを幾くようにしてできる短い線を集めて、花の形や幾



何模様にするのも面白い。ろうが乾いてから染色する。染材を溶かした水の中につけ込む。既製の染材ではなく、たまねぎの皮を煮出した水につけるのも趣があつて、私は必ず一色に加える。布のろう染めと同様に、模様を描き変えながら何色か重ね染めをすることもできる。染色をした後、乾かしてろうそ



くの火にかざしながら、絵模様になっているろうそくを溶かす。やわらかい布や紙で少しずつつき取ると、完成した部分が見えてきて、楽しみが増す。その他に、たまご全体に絵具を塗って、釘のような物で引掻きながら模様を付けたり、麦わらを細く切ったのを張り付けたりする手法があるが、私個人

では経験がない。小さな葉を殻に張り付けけるようにしてガーゼに包み、しっかりと結んだまま染料につけ込む方法もある。子ども達が幼稚園で作って持ち帰ったのだが、これは、火を使うこともなく、色が葉の下に染み込んで、思いがけない面白さが生まれて、楽しい方法の一つである。

出来上がった絵付けたまごは、一緒にしてかごにならべたり、一つ一つにリボンを通して、花びんに差した小枝（季節から白樺や猫柳が多いのだが）に結んで下げたり、壁掛けのように飾ったりする。

復活祭の月曜日、女の子達は胸をわくわくさせ、おしりをたたいてもらうのを待つ。家族以外にも、男の子達が家々を訪ね、昔からの詩を暗唱しながら、女の子のおしりを柳のむちでたたく。もっとも、代わりにいただくのは、絵付けたまごだけではなく、中身の入った固茹でたまごやお菓子という場合も多くなってきた。

とうもろこし人形

この国で栽培されるとうもろこしは、飼料用である。涼しい気候のせいも、改良する努力が足りないのか、背も低く、実も固い。若く実のやわらかいのをゆでて、街角で売っているのを見たことがあるが、それを珍しく思うほど、人の口に入るとうもろこしは少ないようである。我が家では、夏の料理の一つに入っていて、一回はとうもろこしのクリームスープを作るようにしている。茹でて、実をはずし、ミキサーにかけて濾すという作業を、あたかも儀式のように毎年繰り返している。このクリームスープの調理ととうもろこしの皮の乾燥がセットになっている。手に入れたとうもろこしの大部分が食べられず、皮ばかり山のように積まれたのを目の前にしてから始まったことなのだが。

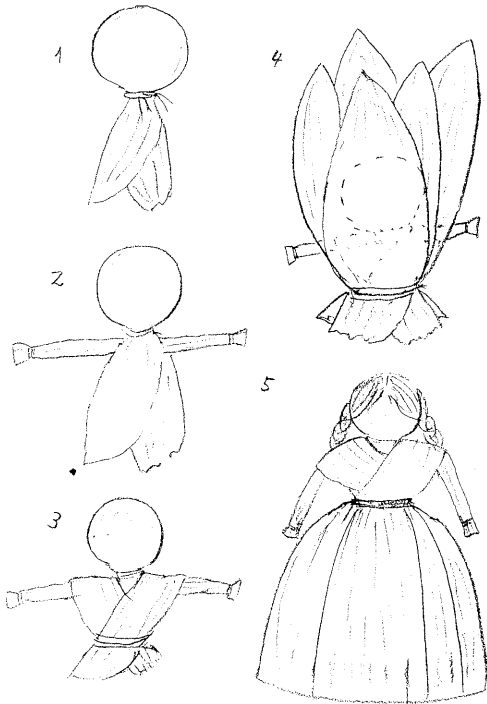
よく乾したとうもろこしの皮を水に浸して、少しやわらかくしてから、形づくっていく。タオルでふいて水気を取り、頭にする部分、腕にする部分、胴

にする部分、スカートにする部分、場合によっては袖にする部分を想定して、選び分ける。幅が広くやわらかい皮を表面に用い、その他の皮は内側に入るところに利用する。

やわらかい紙や綿をまるめて、一枚の皮で包んで太目の糸で結び、頭を作る。細い針金を中心に巻くようにして、両端の手首になる部分を糸で

結び、腕を作る。頭の部分の結び目の下に腕をはさみ、胴のふくらみをつくるように、丸めた紙か綿もはさむ。三折りにした細長の皮二枚を、左右から首を包むように着せ、胸元を合わせてウエストの部分で結ぶ。スカートになる皮を中表、逆さの状態に数枚をずらしながら、胴の回りに当てる。その上に同じやり方で、残った皮を芯になるように重ねて、糸でしっかり結ぶ。スカートの部分を返して下におろし、落ちつかせる。スカートの裾をはさみで切

りそろえる。端切れを利用したエプロンやスカートを付けたら、腕を曲げて、ドライフラワーで作った花束を持たせたりすると、表情が豊かになる。頭へのりをつけて、麻ひもをほどいて切りそろえた髪をのせてもかわいい。材料が足りない場合は、芯になる部分をクレープ紙で補うこともできるが、急がず



に材料を集めて、必要な皮を選び取るの方が、家庭での民芸品作りに合っているように思う。

民芸品としてのとうもろこし人形は、おそらく、

日本での姉様人形のようなものではないだろうか。

飼料に使われた後のとうもろこしの皮は、土間に積まれて燃料の一部になっていたにちがいない。そこから数枚取り除いても、困る人はいない。不要と思われる紙を折りたたんで人形を作る。不要と思われる

るともろこしの皮で人形を作る。遊んだ後は捨てて、また遊ぶために作る。作りながら上手になっていく。作りながら工夫が生まれる。母子で作る民芸品も、こんなふうだと楽しい。

子ども達の作品を入れた引出しを開けるのも稀になつてしまったが、毎年繰り返される伝統行事に

は、年を重ねて作ってきた小さな物を並べるのが、我が家の慣わしになっている。

(ブラハ在住)

